

「どんなことがしたい？」とたずねて

十日町市立十日町小学校

六年 吉 樂 美夏野

私の通っている学校は、十日町小学校、ふれあいの丘支援学校、発達支援センターおひさまの三施設が一つになった“夢の学校”です。ふれあいの丘支援学校とは、いろいろな障がいのある子供達が自分のペースで学習することが出来る学校です。私達とふれあいのお友達は一年を通して、学年をまたいだ“山びこ班”を作って一緒に活動しています。

四年生の総合的な学習の時間では、ふれあいのお友達と交流する活動を行いました。運動会では、山びこ班ごとに分かれて、ふれあいのお友達の競技を応援しました。文化祭では、一緒に描いた大きな絵を背景に「ひまわりの約束」を歌と手話で発表しました。

六年生になった今年の運動会、私はあこがれの応援団長に立候補しました。ふれあいの丘支援学校の小学部と中学部からも一人ずつ応援団員が来ました。中学部の人は初めから積極的に練習に来てくれましたが、小学部の子は、なかなか練習に来てくれませんでした。そこでふれあいの先生を通して、小学部の子とやり取りをすることにしました。

「どんなことがしたい？」
とたずねてもらうと、

「一番、簡単なものがいいです。」

という希望がありました。応援台に乗ったワクワク感を味わってもらいたいと思い、他の応援リーダーと相談をして、三・三・七拍子の担当をやってもらうことにしました。

運動会前日には応援団全員で円じんを組み、

「白組、がんばるぞー！」

「オーー！」

ふれあいのお友達も元気に言ってくれました。運動会当日では、小学部のお友達も、胸をはって、一番大きな声を出し、何度もみんなの先頭に立つてくれました。ふれあいの先生に教えてもらいながら、自主練習をたくさんしてくれたそうです。三・三・七拍子をやり切った時のうれしそうな笑顔を見て私もうれしくなりました。運動会が終わった今でも、会うたびに、

「あ、美夏野さんだ。」

とあく手をしてくれます。きっと心に残る運動会になったのではないかと思います。

私は今まで、ふれあいのお友達のように障がいのある人に対しては、全てのことを手伝わなければいけないと思っていました。しかし、それでは、できること、やりたいことをうばってしまうのと同じです。しっかり相手の考えを聞き、必要な場合はサポートをし、必要でない場合は相手に任せる、そのような信頼が福祉を考えていく上では大切なことではないかと気付きました。これからは、「どんなことをしたい？」とたずねて答えをもらう言葉のキャッチボールができるように気を付けたいです。どんな人とも、たがいの考えをしっかりと伝える関わり合いを大切にしながら生活していきたいです。

新潟県教育委員会教育長賞

心の交差点

新潟大学教育学部附属新潟中学校

一年 瀬高莉央

いつもの通学路。いつもの交差点。毎日出会う人がいる。その人は、バスが通るたび、大きな声を出したり、飛び跳ねたりする。大人の男の人で、体も大きい。声も大きいので、かなり目立つ。

最初、ちょっとした恐怖心を持っていたが、次第に、ただバスが好きで見ているだけだと分かる。そして、おそらく、彼は障害のある人だ。

毎日顔を合わせていると、少しずつ親しみがわいてくる。いつも私より早い時間に交差点にいたので、私より早起きなのかもしれない。雨の日も、朝から三十度を越えるような夏の暑い日も、毎日決まった時間に来ているのだから、私より根性があるに違いない。

「私、負けてるな。私もがんばろう。」
毎朝、勇気をもらって学校へ向かう。

ある日、事件は起こった。私と年代と思われる男子数名が、その人の動画を取り始めたのだ。遠くからでも、彼らの顔に意地悪な笑みが浮かんでいる事が分かる。わずか数秒の出来事であったが、私は強い怒りを覚え、注意できなかった自分に腹が立った。

しかし、同時に、私には、彼らを責める資格が無いことも分かってきた。私にも、障害者への差別や偏見の気持ちがある程度なりともあるからだ。

確かに、動画を撮るような、人を傷つける、失礼な行為はしないし、公の場で無配慮に差別的発言をすることも無い。だが、手足がない人や、奇妙な声を出す人を突然見かけたら、戸惑ってしまう。じろじろ見ないように気を付けながらも、まるで、そこには存在しないかのよう目線をそらすのも、どこか差別的で、違和感がある。何が偏見に該当し、障害のある人は、何を差別と感ずるのか、それすら分からないのだ。

無知であることほど、罪なことはない。優しい気持ちや、よかれと思ってやっている行動が、一方的に親切を押しつけている場合もある。私の学校では、一年に何回か、特別支援学校の人と交流する時間がある。いろいろな障害のある人がいて、皆それぞれ性格も違う。障害があっても、上手にできないこともある。私は、障害者は、手助けが必要だと思いついて、いろいろな先回りして声を掛けたり、手伝ったりして、支援学校の友達を怒らせたことがある。得意分野では、支援が必要どころか、私よりも活躍できていたのである。学校での短い交流時間で、すべてが分かったような気になつてはいけませんが、無知が差別や偏見の要因の一つであることは間違いない。私達は皆、人と人とのつながりの中で生きていく。障害のある人も、無い人も、お互いに意見を発信し合って、尊重し合いながら生きていかなければならない。最初は誤解があったとしても、回数を重ね、理解を深めていけば、自然とマナーやルールが出来ていくだろう。

通学路の交差点。私は事故が起きたのを見たことがない。私達は小さい頃から交通ルールを学び、経験を積んで、安全に交差点を渡っている。心の交差点も、誰もが安全に渡れるように、私達は学んでいかねばならない。

家族だからできる支え

柏崎市立高柳中学校

二年 今井陽己

僕には、一緒に暮らしている祖父と祖母がいます。毎日畑仕事や家事をして、いつも元気な二人です。

そんな二人ですが、最近、少しずつやりとりがちぐはぐになることが出てきました。

例えば、僕が、

「明日は大会だから、お弁当をお願いします。」

と言っても、次の日にはすっかり忘れてしまっていることがあります。時には、

「ちゃんと言ってくれなきゃ、分かんないや！」

と叱られてしまうことさえあるくらいです。

他にも、僕が学校であった出来事を話していると、

「○○って、誰だっけかなあ？」

と毎回のように聞いてきます。

このようなことは、悪気があるわけでも、僕の話を真剣に聞いていないわけでもないことは分かっています。でも、同じことを何度も聞かれたり、説明させられたり、叱られたりするのには面倒だし、とてもイライラします。だから、僕もつい口に出して、

「面倒くせえなあ。」

「うるさい！」

などと言ってしまう。

そんな僕の態度を見かねたのか、ある日、僕は父に呼ばれました。そして、

「介護とか福祉とか、そういうことを一番よく学べるのは、お前のじいちゃん、ばあちゃんと一緒にいる今だ。二人の様子をよく見ておけ。」

と言われました。将来は福祉に関わる仕事がしたいと言っていた僕のために、父がこんなふうに出てくれたのだと思います。

それから僕は、父の言葉が何だか気になって、祖母のことを客観的に見るようになりました。すると、気付いたことがあります。

それは、僕の姉が祖母に向かって強い口調で怒鳴っている時に、祖母はすぐく辛そうな、申し訳なさそうな表情をしているということです。

また、僕たちに何かを聞き返すときには、最初に必ず、

「悪いんだけど……。」

とやはり申し訳なさそうな表情で、前置きをしていることです。

僕は今まで、祖母の気持ちを考えたことがありませんでした。でも、祖母は僕たちに悪いと思っているのだということに気付いたのです。一番辛い思いをしているのは祖母自身だったのです。

先日、学校で高齢者疑似体験をする機会がありました。手足の関節に重りの入ったサポーターをし、視界の悪いゴーグルを付けて、歩い

たり階段を上り下りしたりしました。普段、何げなくしている行動が、僕の想像以上に大変でした。祖父母は、こんなふうに体の変化を不自由に感じながら日常生活を過ごしていたのか、と改めて考えさせられました。

祖父母は、今後生活のあらゆる面で不自由を感じるが増えてくるでしょう。本人たちが一番辛いのに、一番身近にいる家族に文句を言われたり、怒鳴られたりすることはあまりにも辛いことだと思いません。だから僕は何度同じことを聞かれても、何度も優しく答えてあげられる家族でありたいと思います。

NHK新潟放送局長賞

人を応援できる人に

見附市立田井小学校

五年 平井 花菜羽

私の通っている小学校は全校で32人の小さな学校です。5、6年生になると全員が水泳、陸上選手になります。他の学校では水泳を習っている子、速い子が出場する大会に私達田井小学校は全員で出場します。今年がんばってやっと100m泳げるようになった私も選手です。7月の水泳大会で私は50m背泳ぎ、100m自由形、そしてリレーにできました。とても暑い日で私は二種目終わった時、とてもつかれたと思っていました。でもリレーではアンカーです。友達が今日はとても気合いが入っていて私もがんばらなければいけないと思いました。

「ヨイ、バーン」の合図でスタートしました。他の学校はとても速くどんどん差がついてきました。私が3番目の友達を待っている間に1位、2位はもうゴールしました。となりの子もみんなとびこんでいききました。私が一人で友達が泳いでくるのを待っていました。広いプールにだれもいなくなってから私はとびこみました。泳いでも泳いでもゴールにつかずとても長く感じました。やっとゴールした時、会場から大きな手が聞こえました。そして他の学校の子達が「がんばれ、がんばれ田井小」と言ってくれていたことに気づきました。

自分の学校がゴールした後一人泳ぐ私を応援してくれていた事に、気づきむねがいっぱいになりました。

私は、他の学校の応援に助けられました。一人で泳いだはずかしさではなく、たくさんの人に応援された忘れられない大会になりました。

私は、助け合いとはがんばっている人を応援できることから始まり自分のできることをだれのためにもできることだと思います。私も近くの老人ホームにボランティアに行きます。自分に何ができているのかわかりませんがおじいちゃん、おばあちゃんは喜んでくれます。

「私も田井小学校の卒業生だよ。私の時は、こんなだったよ。」

「私の孫はね。」

とたくさん話をしてくれる方もいます。

「また来てね。」

と言われるとうれしくなりボランティアに行く心が温かくなりました。

「ありがとう」と言われるけど私も「ありがとう」という気持ちになります。

水泳大会やボランティアで感じた思いは、同じです。何かをやったから助け合いではなく人それぞれがちがった形で自然とやっていることもだれかのためになっていると思います。私は友達より何をやってもおそいけど、どんなことにもちよう戦って行きたいです。そして人を応援できる人になりたいです。

新潟県社会福祉協議会長賞

老人ホームの人たちの笑顔

妙高市立妙高原南小学校

四年 青柳乃愛

「のあちゃん、すごかったよ。むねいっぱいで泣いちゃいそう。」と車いすに乗っているわたしのおばあちゃんが言いました。それは、三年生の時、老人ホームでクラスのみんなと歌を歌って、家に帰った時のことです。わたしのおばあちゃんは、週に二回、老人ホームに通っています。お姉ちゃんの発表の時もわたしの発表の時も、ちょうどおばあちゃんのデイサービスの日でした。だから、おばあちゃんは、楽しみにしていても喜んでいました。わたしは、老人ホームで歌を歌ってよかったなあと思いました。

わたしは、歌を歌うことが大好きです。沖なわにいた時、三線を習っていました。わたしは、古典の「あはぶし」で会長賞をとったことがあります。新潟に引っこしてきて、歌が歌いたくて、けやきの森ジュニア合唱団に入りました。合唱団のメンバーは、小学一年生から高校二年生まで入っています。四部合唱で、とてもきれいにハモっています。

今年の七月二十八日に、別の老人ホームで歌を歌うことになりました。「平和の鐘」などの七曲を歌いました。わたしは、入場する時に一番先頭だったので、とてもきんちゃんうしました。会場を見わたすと百人ぐらいのおじいちゃん、おばあちゃんがありました。いすにすわっ

ている人、車いすの人、ねたきりの人がいました。歌を歌い始めると、会場がシーンとしずかになりました。泣いている人やニコニコわっている人、目をつぶっている人がいました。みんな、しんけんに、楽しそうに聞いてくれました。曲と曲の間に、

「かわいいねえ。かわいいね。」

「楽しいねえ。よかったなあ。」

と言う声が聞こえてきました。その言葉を聞いて、できるだけきれいな声で、もつと一生けん命歌を歌いました。会場には、お兄ちゃんとお姉ちゃんとお母さんも来ていました。歌い終わるとはく手がなり止みませんでした。だから、ピリーブを歌いました。みんなは笑顔になり、幸せそうでした。

わたしは、わたしたちの歌声を聞いて喜ぶ老人ホームの人たちを見て、わたしのできることができてよかったなあと思いました。これからも、わたしは一番好きな歌で、みんなを笑顔にしていきたいです。二学期に行われる、音楽課外、けやきの森合唱団、オペラ公えんをワクワクドキドキ楽しみたいです。

新潟県共同募金会長賞

シャボン玉

上越市立潮陵中学校

三年 黒田 よつは

中二の夏、職場体験でデイサービスへ行った。事前学習やスタッフの方々から、介護の精神と高齢者福祉における現在の問題を学んだ。今、日本の人口の四人に一人が高齢者の時代。今後、更に少子化が進み二〜三人に一人が高齢者となっていくと言われている。そんな中、認知症高齢者の増加やそのサポート、核家族化の進行と介護機能の低下、年金・介護・医療費などの社会保障費の増加など問題は山積みで「老害」などという言葉も聞く。とても悲しい。

デイサービスで利用者の方たちと話していると、とても穏やかな気持ちになった。昔の思い出や体験談を語る時、伝えようとする言葉の一つ一つが深くリアルで、まるで時空を超えるような感覚だ。批判的、攻撃的なことを尖っていると、年と共に落ち着いてくることを丸くなると言うが、それとは違う。大きくてあたたかい、シャボン玉のような、まあるい雰囲気があるのだ。お年寄りを支えるスタッフの方も同じシャボン玉の中で温かく接する。この空気は絶対に「害」などと言われるものではないと確信した。

私の住む谷浜・桑取地域は、ブナ林から日本海までをエリアとする自然豊かな静かな町だ。過疎化が進みつつあり、一人暮らしの高齢者も多く、福祉問題とは隣り合わせだ。しかし、この町には古くから「結」

と呼ばれる助け合い精神がある。地域全体に根付き、今もお伝承されている思いやりの心だ。四季の巡りを楽しみ、時に耐え、自然に逆らわず季節に沿って暮らしている。節目にはその季節がきちんと巡ってきたことを喜び、恵みに感謝し、祀る。年輩の方の豊富な経験から生まれる勘を元に、若者の技量を支え、それぞれの人がそれぞれの仕事をし、地域全体が丸く結びついている。これが「結」である。

この地域でお年寄りと共に暮らす私たちにとって、高齢者の方々は当然、人生の先輩として敬意を持って接する意識がある。そして、高齢者の方たちも、地域の若者や子供を我が子のように思い、理解してくれる。自分の知恵を全て託してくれるように声をかけてくれ、いつも見守ってアドバイスをくれる。また、失敗した時は挫折の矢印を前向きな成長として方向づけてくれるのだ。この地域でお年寄りからたくさん肥料をもらい伸び伸び成長させられているから大いに失敗もできることに感謝している。高齢者はお荷物や害どころか、互いに高め合える、いなくてはならない存在なのだ。

この「結」こそ、助け合い、支え合いの気持ち、福祉の基本精神であると思う。家族、親戚、隣近所、町内、地域、とたくさん結び目をもっているそんな谷浜・桑取地域は、福祉のグッドデザイン地域だと思う。地域全体が、あたたかく大きなシャボン玉に包まれ、そのきれいな球のふちどりをお年寄りが描いてくれる。福祉の公的サービスに頼るだけでなく、地域全体、暮らす人々全員で支え合っていく、それが当たり前のこの地域が私の自慢だ。

誰でもいつかは高齢者になる。自分の未来でもある、次の世代が暮らしやすい老後を迎えられる社会になるよう、「結」の精神で支えていかななくてはならない。